

茨城大学学報

第344号

平成31年4月～令和元年5月



創立70周年を迎えました

INDEX

- ◆ 茨城県と連携した地域気候変動適応センターを学内に開設
- ◆ 高輝度光科学研究センターと量子線科学の研究・教育に関する連携協定締結
- ◆ 平成31年度入学式
- ◆ コミットメント・セレモニー開催
- ◆ 「茨城大学社会人リカレント教育フォーラム」を開催
- ◆ 五浦文化研究所「天心記念館」をリニューアル公開
- ◆ 図書館所蔵の貴重資料の修繕費をクラウドファンディングで調達
- ◆ 茨城大学創立70周年 記念事業展開&式典開催

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 茨城県と連携した地域気候変動適応センターを学内に開設

4月1日、気候変動適応法に基づく「茨城県地域気候変動適応センター」を茨城県と連携して本学内に開設しました。

地球温暖化などの気候変動への対応にあたっては、二酸化炭素の排出削減に代表される緩和策とともに、気候変動が引き起こす影響への適応策の推進が必要であり、国においても「気候変動適応法」が昨年（2018年）制定・施行されました。同法では都道府県や市町村に対して、気候変動適応計画の策定とともに、必要な情報の収集や助言を行う拠点として地域気候変動適応センターを設置するよう求めています。

茨城県では同法に基づいて「茨城県地域気候変動適応センター」を設置することとし、協力事業者の公募を行った結果、長年にわたって気候変動の研究・教育と社会実装に取り組んでいる本学地球変動適応科学研究機関（ICAS）が事業者に決定しました。

2006年に設立された本学 ICAS は、現在、文系・理系の枠を超えた60人の研究者が参加しており、これまで東南アジアや南太平洋地域など、気候変動の影響が顕著な地域での調査などを通じて影響予測や適応策の知見を蓄積し、近年は茨城県を含む多様な地域における精細な影響予測や、防災・減災の取り組み、人材育成を積極的に進めています。

地域気候変動適応センターは、昨年12月の埼玉県を皮切りに、全国の各都道府県で設置の動きが進んでいますが、大学を事業者とするセンター設置は全国で初めてとなります。茨城県地域気候変動適応センターの事務局は本学水戸キャンパス内に置かれ、今後は国立環境研究所気候変動適応センターなどの機関とも連携しながら、気候変動影響・適応評価、気候変動影響に関するローカル情報の収集・検討、自治体適応策策定支援、公開講座・防災教育・人材育成といった取り組みを進めていきます。

センター長を務める本学大学院理工学研究科の横木裕宗教授は、開設に伴う記者会見において、「全国で初めて大学が事業者となる適応センターを立ち上げていく。そのメリットを最大限活かす取り組みを進め、地域の気候変動適応における『茨城モデル』として発信していきたい」と意気込みを語りました。



左から本学 伊藤哲司 ICAS 機関長、横木裕宗教授、茨城県環境政策課 阿部哲郎課長、嘉成康弘課長補佐

◆高輝度光科学研究センターと量子線科学の研究・教育に関する連携協定締結

4月1日、大型放射光施設 SPring-8 の登録施設利用促進機関である公益財団法人高輝度光科学研究センター（兵庫県佐用町）と本学との間で、量子線科学の研究・教育に関する連携協定を締結しました。

本学大学院理工学研究科は、全国的にもユニークな量子線科学専攻を有しています。同専攻では、中性子線やX線、ミュオンなどの量子線に関する幅広い基礎知識をもち、新素材の開発や創薬などの産業イノベーションにかかわる人材の育成を目指しており、東海村の大強度陽子加速器施設 J-PARC をはじめ、国内外のさまざまな機関や研究者と連携しながら研究・教育を進めています。

SPring-8 は世界最高性能の放射光を生み出すことができる大型放射光施設です。電子を光とほぼ等しい速度まで加速し、磁石によって進行方向を曲げた時に発生する、細く強力な「放射光」という電磁波を用いて、ナノテクノロジーやバイオテクノロジーの研究、産業利用が進められています。

今回の協定は、両者の研究開発のリソースを相互に活かした連携を実現することで、量子線科学の発展を目指すものです。

具体的には、高輝度光科学研究センターの研究者を本学の客員教授等として招聘したり、本学の学生が SPring-8 の設備を利用して演習を行ったりすることで、共同での研究・教育の取り組みの強化を図ります。

同専攻の専攻長を務める池田 輝之 理工学研究科教授は、「量子線科学専攻では、これまでも J-PARC や KEK などの研究機関の設備や加速器を使った実験実習を修士課程のカリキュラムに採り入れてきました。さらに世界有数の放射光施設である SPring-8 も教育の場として活用できることで、日本における量子線科学教育のパイオニアとしての本学の実践的な人材育成機能は、ますます強化されることでしょう。互いの強みを活かし、わが国の量子線利用を支える技術者や研究者の育成に今後も協力しながら取り組んでいきます」と話しています。

◆ 平成 31 年度入学式

平成 31 年度茨城大学入学式が 4 月 5 日（金）、茨城県武道館（学部・専攻科）および茨城大学講堂（大学院）において、大勢の保護者および学内関係者らの参列の中、挙行されました。

今年度は、学部生 1658 人、大学院 529 人、専攻科生 19 人の計 2206 人が入学。学部・専攻科入学式では、人文社会科学部の石橋花さんが全学総代を務め、アカデミックガウンをまとった三村学長に誓詞を手渡しました。



◆ 平成 31 年度入学式 学長式辞

茨城大学長 三 村 信 男

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。茨城大学を代表して、皆さんを心から歓迎致します。また、ご家族、関係者の皆様も、さぞお喜びのことと思ひ、お祝いを申し上げます。水戸の桜も咲き始めました。まさに春本番の美しいこの季節に、1,677 名の新入生を迎えることができ、大変うれしく思っています。

さて、新入生の皆さんは、茨城大学での学生生活に対して、大きな期待を持っていることと思います。そこで、茨城大学ではどのような経験をしてほしいか、私の期待をお話ししたいと思います。

私達が生きているこの 21 世紀という時代は、かつてなく変化の大きく速い時代です。グローバルゼーションによって世界はますます一つにつながっていますし、科学技術はすさまじい勢いで進んでいます。また、温暖化のように地球環境問題や自然災害も大きな問題になっています。

こうした世界で生きていくために、どのような学び方が必要でしょうか。私は、大学での学修の心構えとして「広い視野と深い専門性」を修得することが重要だと考えています。「深めることと広げること」といってもいいでしょう。

この「深めることと広げること」について、私の経験をお話ししたいと思います。



私は、51年前に大学に入学しました。その当時は、高度経済成長の一方で、水俣病や大気汚染が大きな問題になっていました。それで、私は環境工学を専攻することにしました。当時行ったのは、下水処理のために使うパイプの中の水の流れ方の研究でした。来る日も来る日も地下の実験室

で、パイプの中の流れを測定しました。友人は何が面白いのだろうと思ったでしょうが、私はその測定にのめり込みました。その時学んだ流体力学が、その後の私の活動の「土台」になりました。

大学院修了後、海岸環境の研究室に移り、さらに、1990年頃に地球温暖化問題が世界の大問題になったことに触発されて、気候変動について研究するようになりました。毎年、タイなどのアジアの国々、ツバルやフィジーといった南太平洋の小さな島国に出かけて調査しました。結局、この気候変動問題が私の最大の研究テーマになったのですが、大学に入学した時には、全く想像できない研究分野に到達したことになります。しかし、私の研究のベースには、学生の時に暗い地下室で毎日パイプの流れを測りながら学んだ流体力学がありました。それを土台に、私は自信を持って、新しい分野に視野を広げて行くことができたと思っています。

研究者にとどまらず、社会で働く人は誰でも、同じような経験を持つのだと思います。様々な分野を経験してやがてより大きなテーマで仕事をするようになります。人は、生活を通じて、いつもこの「深めることと広げること」を実践していくのです。この変化の大きな社会では、大学を卒業した時の知識だけで、十分ということはありません。社会に出てからも、新しい分野に取り組むために学ぶことが必要です。そのための土台を作ることが大学時代にやるべきことであり、その目標は、「広い視野と深い専門性」の修得にあると、私は考えています。



茨城大学では、学生の皆さんの多様な関心に応える学修の仕組みを整えています。専門教育と基盤教育の幅広い授業や地域での演習や海外留学など多彩な科目があります。また、最近では、学生がアイデアを競う学生ビジネスプランコンテストや自治体の政策提言なども開催しています。これらの内容は、この入学式の後に行うコミットメント・セレモニーで紹介することになっています。

さて、今年は時代が回転する年です。先日、次の元号が「令和」に決まりました。令和がどのような時代になるか、まだ分かりませんが、新しい時代の到来を予感させます。また、本学は、今年5月に創立70周年を迎えます。過去70年の伝統と実績の上に、茨城大学の新しい時代が始まります。この新しい時代を希望の時代にするために、思う存分活躍してほしいと思います。

在学中に、皆さんの関心もどんどん広がり、変わっていくことと思います。その関心の広がりと変化は、皆さんをより大きな成長に導く力です。幅広い問題に関心を持って学ぶことで、自分が何をしたいかをしっかり見つけてほしいと思います。皆さんの中には、無限の可能性があります。それが、茨城大学で花開くように、心から期待をしています。

本日は、多数の保護者の皆様にもご出席頂いています。最後になりますが、保護者の皆様にも一言お話をさせていただきます。

先ほど来お話ししているように、本学では、専門的な知識やスキルとともに、世界を俯瞰的に見る広い視野や課題解決能力、コミュニケーション力といった総合的な人間力を育成する教育を進めています。茨城大学に希望をもって入学した学生達と皆様の期待を実現すべく、学生が成長する教育を行い、社会に送り出すことをお約束いたします。

お子様方にはどうぞ、どのような学生生活をしているのか聞いてください。何か心配なことがあれば遠慮無く、それぞれの学部、学科の担当教員にお話し頂ければと思います。

それでは、以上をもって入学式における式辞と致します。今日は、本当におめでとうございました。



◆ コミットメント・セレモニー 開催

4月5日（金）、平成31年度入学式に続き茨城県武道館で「コミットメント・セレモニー」を開催しました。本学では、ディプロマ・ポリシーとして定める茨城大学型基盤学力を全学生が確実に身につけるための仕組みを「茨城大学コミットメント」と呼んでいます。入学式後には、新入生や保護者に「茨城大学コミットメント」を知ってもらい、そのメンバーとして迎えるためのイベントとしてコミットメント・セレモニーを平成29年度から開催しています。

今年は太田寛行理事・副学長（教育統括）の進行のもと、地域や海外で多様な活動をしている5人の学生が登壇し、iOP でやってみたいこと・やってみたことを発表。その後、各学部長も登壇して新入生にメッセージを送り、各学部の入学生の代表に「コミットメント・ブック」を手渡しました。



◆ 関彰商事株式会社向けのオリジナルリカレント教育プログラムを開始

社会人の学び直しニーズに応える「茨城大学リカレント教育プログラム」の一環として、関彰商事株式会社との連携による「セキショウリカレント教育プログラム」を開始しました。

今年4月に始まった「茨城大学リカレント教育プログラム」は、①公開講座・公開授業から1科目単位で誰でも自由に受講できる「オープンコース」、②体系化した科目カテゴリから選択して学び、一定の受講により受講証明が授与される「専門コース」、③企業・団体の要望にあわせて教育プログラムをカスタマイズして提供する茨城大学独自の「カスタムコース」の3コースで構成されています。「セキショウリカレント教育プログラム」は、「カスタムコース」の第一弾プログラムとして実現したものです。

エネルギー事業のほか、国内外メーカーの自動車を扱うディーラーの運営やベトナムにおける人材コンサルティング等を手がけている会社においては、業務に直結する技術や知識、語学スキル等に留まらず、さまざまな国・地域の歴史や文化、あるいは環境に係る幅広い知識を身につける機会を従業員に積極的に提供しています。そうした会社の姿勢やニーズを踏まえ、本学と会社の間で昨年10月から協議を進め、基盤教育科目および人文社会科学部の開講科目から選んだ約20の授業で構成するオリジナルプログラムを用意しました。

4月10日には本学水戸キャンパスにて開講式を行い、会社およびグループ企業の社員16人の受講者が受講許可書を受け取りました。開講式で本学の三村信男学長は、「今回の教育プログラムへの参加が今後の継続的な学びの入り口となり、みなさんの問題意識を刺激する形になることを期待している」とエールを贈り、また、関彰商事株式会社の関正樹社長は、「学ぶことで人生が豊かになることが家族や周りの社員にも影響して、学ぶということがこんなに楽しい、すばらしいことだと感じてもらえるようなキャンパスライフを送ってほしい」と述べました。

受講者代表として登壇した幾浦誠さんは、「貴重な社会人の学び直しの機会をいただいたので、多くのことを学びながら、自身の成長だけでなく、学んだことを職場に持ち帰って、今後の仕事に活かしたい」と抱負を語りました。



プログラムの16人の受講者と本学・関彰商事の関係者による記念撮影



本学 三村学長から受講者に受講許可書が手渡された

◆ 五浦文化研究所「天心記念館」をリニューアル公開

このたび本学五浦美術研究所では、関連資料の展示室である天心記念館の改装および展示内容のリニューアルを行いました。

天心記念館は1963（昭和38）年に建設され、平櫛田中作の「五浦釣人」「岡倉天心先生像」、岡倉天心の釣り船「龍王丸」などを展示しています。2011年3月の東日本大震災の被害から復旧した2012年からは、六角堂再建の経緯を紹介する展示や映像上映、映画『天心』撮影時に使用した複製画展示などを行っていました。しかし震災発生から8年が経つ中、地元住民からも、震災前のような天心ゆかりの資料や美術品の展示にして、完全に復興したという形を示してほしいという要望が多く聞かれるようになっていました。

今回の改修では、壁紙を張り替え、壁面展示ケースと照明を新しく設置して明るい印象が増し、また高さのある木彫の「五浦釣人」を中心に置くことで、広がりを感じさせる展示空間となりました。

また、震災以降展示をとりやめていた、平山郁夫作の日本画「日本美術院血脉図」（複製）や平櫛田中作の木彫「活人箭」の展示を8年ぶりに再開しました。さらに、これまでの復興過程の展示紹介に替えて、「岡倉天心記念六角堂復興基金」への寄付者を紹介する銘板も掲げました。

これらの改装は今年2月に完了して順次公開を進めていましたが、4月17日からは、五浦海岸をジオサイトのひとつとしている茨城県北ジオパーク構想のコーナーも新設され、天心自身が感銘を受けたという海岸の景観を成す奇岩の標本や解説パネルも展示しています。

今回のリニューアルを手がけた本学五浦美術文化研究所元所長の小泉晋弥名誉教授は、「今回のコンセプトは、天心が五浦でどう生活し、なぜ五浦に来たのかを見えるようにすること。五浦が日本に誇れる場所だということを、訪れる方々に感じてもらえるような展示になった」と話しています。



リニューアルされた展示空間
中央は平櫛田中作の「五浦釣人」



ジオパークとしての再認定をめざす茨城県
北ジオパーク構想の展示コーナーも

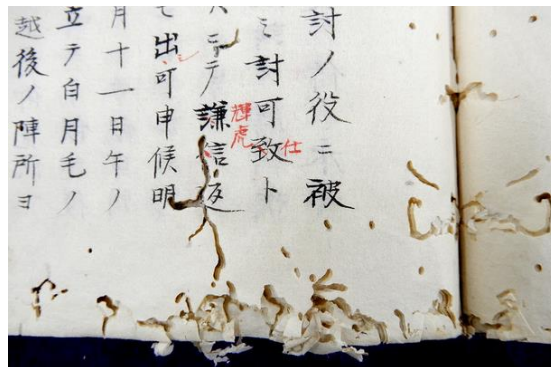
◆ 図書館所蔵の貴重資料の修繕費をクラウドファンディングで調達

本学図書館において、旧水戸藩出身の史学者・菅政友^{かんまさすけ}（1824～1897）が所蔵していた約10,000冊に及ぶ貴重書（菅文庫）の修繕のため、クラウドファンディングを利用して寄附を呼びかけたところ、118万円の寄附が集まりました。今後資料の修復作業や公開を手がけていきます。

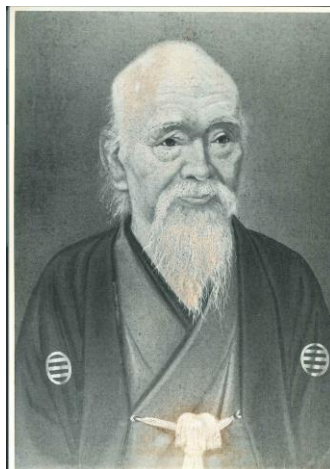
菅文庫は、水戸藩による『大日本史』の編纂にも携わった水戸学派の史学者である菅政友が蒐集した蔵書で、1951年に茨城大学設立期成会が菅家から購入・寄贈され、現在は同大図書館が管理をしています。国書4,000部・8,000冊、漢籍500部2,000冊、各種写本類など約10,000冊の一大コレクションで、現在もデジタル画像化を順次進めています。

一方で、菅文庫の中には、同大に寄贈される以前からカビや虫食いによる劣化が激しいものも多く、デジタル画像化の作業の上でも障害となっていました。これらについて、大学の自己資金による修繕には限界があることから、本学としては初めてクラウドファンディングサービス「Readyfor」を利用して3月中旬より寄附を呼びかけたところ、約1ヶ月間の募集期間で当初目標の100万円を超える118万円の寄附が集まりました。

今後、順次修繕作業を進め、寄附協力者などを対象に資料の内容を紹介するギャラリートークなどの企画も検討しています。



▲菅文庫の資料より。害虫による破損部分。



▲菅政友（1824～1897）

◆ 茨城大学創立 70 周年 記念事業展開&式典開催

5月31日、茨城大学は創立70周年を迎えました。

創立70周年記念事業として、本学では、まず学修環境の充実を図り、水戸キャンパスでは福利会館（大学生協）の拡充、日立キャンパスでは学生・教職員の知恵や想いを活かした正門景観整備、阿見キャンパスでは新しい「フードイノベーション棟」の建設と、各キャンパスの整備を進め、地域に開かれた大学としての機能を強化します。

また、茨城新聞に掲載された記事と卒業生へのインタビュー映像で綴るデジタルの年表「茨城大学ビジュアル年表」(<https://www.ibaraki.ac.jp/chronicle/>)の制作は、地域の知の拠点としてのあゆみを振り返る機会となりました。

さらに未来へ向けては、「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」を立ち上げ、学生・教職員・地域が一緒になって大学の本質を探る議論を進め、「知が本来もつダイナミズムを最大限発揮させ、創造的な地域をつくるための駆動役に」という新たなビジョンを構築しました。

5月25日には創立70周年記念式典を水戸キャンパス講堂で開催しました。

式典には永岡桂子文部科学副大臣、大井川和彦茨城県知事、永田恭介筑波大学長らをはじめ、茨城県内各自治体や企業関係者、大学関係者等約300人が出席しました。

式典で三村信男学長は、鈴木京平初代学長が開校式で学生を前に語った「時勢は移り、世は変わったが、日本文化の中心地となるような立派な学風を樹立してもらいたい。野心満々たれ」という言葉を紹介し、70年の茨城大学の歴史を踏まえて「地域創生の知の拠点、世界に輝く多様なナンバーワン研究を生み出す大学を目指す」と述べ、令和新時代への決意を表明しました。

続いて、永岡文部科学副大臣が、本学が本年度から本格的に実施する主体的な学修のための新たな仕組み「iOP（internship Off-campus Program）クォーター」に触れ、「茨城大学が知識集約型社会を牽引する人材育成の先導役として、より一層の成果を社会に還元されることを期待する」と祝辞を述べました。

また、チアリーディングサークル「Cherry's」の華やかなパフォーマンスで幕を開けた後半の第二部では、佐川泰弘副学長が、「茨城大学ビジュアル年表」をもとに本学の歴史を振り返り、現在の到達点として施設整備など学修環境の充実の取り組みや特徴ある研究を紹介するとともに、「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」による将来ビジョンを発表しました。

式典後は、袖山禎之山梨大学理事（前本学理事）、小新敏充情報システム研究機構事務部長（前本学総務部長）など、多くの関係者が参加して祝賀会が行われ、盛会のうちに幕を閉じました。

